



一年で一番長い2学期もあと3週間ほどで終わろうとしています。今学期も、本校の教育活動に皆さまからたくさんのご理解とご協力いただきました。本当にありがとうございました。

さて、先週あたりから一気に冬の足音が聞こえるようになりました。今では、2学期が始まった頃のあの暑さが嘘のように思えます。こうした季節の移り変わりを覚えること一つとっても、私たちは、確かに「今」を^{うそ}生きているのだと感じます。いつもなら学期末の校長室だよりは、2学期を振り返って書くのですが、今号は、先月^{おとす}訪れた宮城県石巻市^{いしのまき}のことについて書こうと思います。

先月東北地方に行く機会があったので、少し足を延ばして石巻市にある2つの東日本大震災の震災遺構を訪ねました。大川小学校と門脇(かどのわき)小学校です。どちらの学校も震災後の人口減で閉校しましたが、震災の事象と教訓を伝えるために遺構として保存されています。

大川小学校と言えば、震災当時学校の管理下にあった児童78人のうち74人と教職員11人のうち10人の、合わせて84人が、津波の犠牲になった小学校として知られています。私もそのことはニュースなどで知っていましたが、学校の階段に貼ってあった防災のポスターに写っている校舎を毎日目にするうちに、一度この目で見てみたいと思っていました。



石巻市へは、仙台市から車で北へ約1時間です。そこからさらに北上川に沿って海を目指すと、新北上大橋の近くに大川小学校があります。今では周辺はずいぶんきれいに整備されていますが、震災当時は瓦礫^{がれき}の山だったそうです。そして、かつて150軒の集落があったというこの地区には、現在人家は^{じんか}ありません。時折車が通るだけの、とても静かな場所でした。

私が訪れた日は、雲一つない晴天でした。人影もまばらな休日の朝、校舎が陽に照らされているのを見たとき、なぜだか急に涙があふれ出てきて、そこから動くことができませんでした。しばらくしてようやく落ち着きを取り戻し、ゆっくりと校舎の周りを歩きました。震災当時あったたくさんの瓦礫は、すべて撤去^{てつきよ}されていますが、壁が壊^{こわ}されてむき出しになった教室、津波の跡^{あと}が残る2階の天井や持ち上げられた床、なぎ倒されたコンクリート製の渡り廊下に基礎部分だけが残った体育館など、あれから10年以上たっても、ここでどんなことが起きたのかを容易に想像させてくれました。そして、あの日、大川小の子どもたちが恐怖と寒さに震えて50分もの長い間避難していたという運動場に立ち、何とも言いようのない気持ちを感じていました。それは、津波の恐ろしさとかではなく、当たり前の日常が突然消えてしまうということへのやり場のない気持ちだったのかも知れません。

大川小学校では、大津波警報が出ていたにもかかわらず、2次避難をすぐにせず、津波到達直前になって避難に向かったのは、橋付近の少し高い場所でした。その結果、津波は避難開始後約1分で到達して子どもたちを飲み込みました。堤防を越流^{えつりゅう}してきた津波と海から来た津波がぶつかり、高さ9m近くにもなって校庭で渦を巻いたといわれています。この悲劇には、その日校長先生が不在で、指揮系統がはっきりしなかったことをはじめ、学校近くの裏山は避難場所として設定されていなかったことや、そもそも

河口から4kmも離れたところに津波が来るとは想定していなかったことなどたくさんの要因がありました。しかし、学校の対応については、後に民事裁判となり、学校側の過失が認められています。大川小の防災マニュアルには、「近隣の空き地・公園に避難」と書いてありましたが、近くには空き地も公園もありませんでした。教育委員会もマニュアルの点検・指導をしていませんでした。裁判では、あの時の現場での判断ではなく、津波が来るとした想定が命を守る対策につながっていなかったことが問われたのです。

そうしたことを併設された伝承館で知ったあと、学校近くにある裏山に行きました。裏山の中腹にある土止めされたコンクリートの広場には、5分ほどで簡単に上ることができました。そして、その数m下には、津波到達点の印（写真左下）がありました。ここに来れば全員助かったことでしょう。そこから校舎を眺めると、また涙があふれました。



大川小学校を後にして、車で来た道を戻って南に下り、次は門脇小学校に行きました。この学校も震災遺構として保存されています。校舎は、津波と津波火災に遭いましたが、現在は、被害を受けた部分をそのまま残し、焼けなかった部分を資料館にしています。この学校は、大川小学校より海に近いのですが、児童や教職員は全員避難することができました。いや、海に近いからこそ避難できたのではないのでしょうか。なぜなら、この学校では、津波が来たら裏山まで登ることが決められていたからです。当時は、全員が一旦運動場に避難したあと、大津波警報の知らせを聞いて、高学年が下の学年を助けながら急な坂を上ったそうです。靴がなくなった1年生をおぶって上った6年生もいました。校舎屋上に避難した住民も津波火災で校舎が燃える中、教壇を橋にして裏山へ逃げました。しかし、避難できたからとい



ってそれで終わりではありません。門脇小学校では、雪の降る中持ってきたブルーシートで暖をとりながら、次の避難先を先生たちが必死に探しました。この地域で亡くなった500人を超える人の中には子どもたちの保護者もいたので、引き渡しにも時間がかかったそうです。自分の家族の身を案じながらも、目の前の子どもたちのためにできる限り力を尽くした教職員の様子を知って、本当にすごいなと、ただ感心するばかりでした。

大阪へ帰りながら、今、私たちに何ができるのかを考えました。例えば、想定を超えることを言い訳にせず、30年以内に起こる確率が高いと言われている南海トラフ地震への備えを、あらためて見直すことも一つでしょう。しかし、防災の備えだけを十分にすればよいのでしょうか。

その答えは、資料館で見た、当時の門脇小学校の先生が残した言葉にありました。

「クラスの中で授業がしっかりできる、学校が整然と成り立っているのは、日常の生活がきちんとしていればこそなんです。実際東日本大震災のとき、素早く整列して避難するときに大いに役立ったというように思います。」

命を守る種^{たね}は、日々の暮らしの中にこそあるのです。このことを私も、教職員も、子どもたちも、あらためてしっかり心^{こゝろ}に留めておかねばいけないと思いました。